
ムーンライズ・キングダム
Moonrise Kingdom
MOONRISE
KINGDOM
NEW PENZANCE ISLAND
SUMMER
1965

第65回カンヌ国際映画祭オープニング&コンペティション部門正式出品作品
全米No.1大ヒット!（オープニングウィークエンド、スクリーンアベレージ実写映画成績）**本年度アカデミー賞 脚本賞ノミネート!**

★★★★★! 夢見てるような完璧さ!
—— エイミー・ビアンコリー／サンフランシスコ・クロニクル紙

とても陽気なのに、同時に心にしみる、映画の魔法にかけられてしまう!
—— ピーター・トラヴァース／ローリング・ストーン紙

驚くほどにビューティフルな映画。ウェス・アンダーソンにとって最高の功績だ。
—— マノーラ・ダルジス／ニューヨーク・タイムズ紙

マジカル! ウェス・アンダーソンの最高傑作!
—— クラーディア・プイグ／USAトウデイ

ウェス・アンダーソンが描く、キラキラ輝いてチャーミングな、人生のジャーニーに乾杯!
—— A.M.ホルムズ／ヴァニティ・フェア紙

映画はプレシャスで愛らしいが、かなり奥深い。
そしてウェス・アンダーソン監督は、ブルース・ウィリスの本物の演技力を引き出している。
ここ数年で彼の最高のパフォーマンス。
—— レネー・ロドリゲス／マイアミ・ヘラルド

こんなにいいブルース・ウィリスは今まで見たことがない。
ノートンだって完璧だし、マーレイも、マクドーマンドも・・・言うことがない!!
—— ビル・グッディクーンツ／アリゾナ・リパブリック

新人の子役たちから豪華スターまで全員の素晴らしい演技。
成長する上での悲哀と喜びの愛すべき感覚を呼び戻させる。
—— ネヴ・ピアス／エンパイア

全編を通して、愛がいっぱいのジャーニー、
そして、今年劇場公開された映画の中で、最も楽しめて感動出来た映画。
—— マイク・スコット／ニュー・オーリンズ・タイムス



Introduction

12歳のサムとスージーは駆け落ちを決意した。誰も知らない秘密の場所"ムーンライズ・キングダム"を目指して

1965年、ニューイングランド沖にある小さな島で、12歳のサムとスージーは恋に落ちた。ボーイスカウトのキャンプから脱走したサムと、両親の目をかいくぐって家出したスージーは、秘密の場所"ムーンライズ・キングダム"を目指して駆け落ち。そんなふたりを、親、警官、福祉局、ボーイスカウトの子供たち&スカウト犬のスヌーピーらが大追跡！ 島中を巻き込んでの"愛の逃避行"が始まる……。
『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』『ライフ・アクアティック』『ダージリン急行』『ファンタスティック Mr.FOX』など、そのユニークなセンスでファンを刺激し続けてきたウェス・アンダーソン。彼の監督最新作『ムーンライズ・キングダム』は、第65回カンヌ国際映画祭でオープニング作品とコンペティション部門に同時に選ばれるという極めて稀な事態を引き起こした話題作。批評家や映画誌からの評価が高いのは彼の作品ではもはや当たり前のことだが、本作は全米で公開されると、1館あたりの平均興行収入が全米歴代ナンバー 1となるヒットを記録。ウェス作品最大のヒット作にして、最高傑作の呼び声も高く、インターネットのレビューサイトも「チャーミング」「スウィート」「ファニー」「キュート」といった賛辞で埋め尽くされている。これまで一貫して"父と息子"というテーマを内向的、内省的に描いてきた彼が、今回は"ひと夏の冒険"という誰もが共感や郷愁を感じる明快なテーマで新境地を開拓。観客をかつてないハッピーな気持ちに包み込んだことが、大ヒットにつながった。世界中から祝福を受けた珠玉の作品が、いよいよ日本に降り立つ。

ブルース・ウィリス、ビル・マーレイ、エドワード・ノートン……、豪華ハリウッドスターが"ウェス・ワールド"をエンタテインメントに昇華させた

12歳の男女を中心にした多彩な登場人物たちを演じるのは、豪華俳優陣。特に今回は、ハリウッド大作で活躍する俳優たちが、大挙してウェス作品に出演を熱望。見事なアンサンブルを奏でている。島でたったひとりの警官シャープ役はブルース・ウィリス。『ダイ・ハード』などのアクション映画でのマッチョな魅力は封印し、中年男性の悲哀とおかしみを感じさせる絶妙な演技を見せる。ボーイスカウトのウォード隊長役は『アメリカン・ヒストリーX』『ファイト・クラブ』のエドワード・ノートン。生真面目なのにちょっと間の抜けた男を好演している。シャープ警部と不倫をしているスージーの母親役は、『ファーゴ』でアカデミー賞主演女優賞を獲得したフランシス・マクドーマンド。冷酷な福祉局役では、『フィクサー』でアカデミー賞助演女優賞を獲得したティルダ・スウィントンが怪演をみせる。ウェス作品の常連では、『天才マックスの世界』以降のすべての作品に出演しているビル・マーレイがスージーの父親役で、『天才マックスの世界』『ダージリン急行』に主演したジェイソン・シュワルツマンが怪しいボーイスカウトの男ベン役で登場する。サム役のジャレッド・ギルマンとスージー役のカーラ・ヘイワードは共にこれが映画初出演。出演当時の実年齢も12歳だったふたりはフレッシュで初々しい演技を披露している。そして、監督・脚本・製作を務めたウェス・アンダーソンを盟友ロマン・コッポラがサポート。フランシス・フォード・コッポラを父に、ソフィア・コッポラを妹に持つ生粋の映画人である彼が、『ダージリン急行』と同じように共同脚本を手がけた。その他、衣装や美術にもウェスらしい遊び心がたっぷり。アライグマのワッペンがあしらわれたボーイスカウトのユニフォーム、特注のテントやカヌー、さらにはトーテムポールまで、ちょっぴり変ですごくキュートなアイテムの数々は見ているだけで楽しい気分にさせてくれる。
監督自身が「こんな子供時代が過ごせたらいいなという願望を込めて作ったんだ」という通り、監督・スタッフと豪華キャストの大いなる遊び心によって、誰もが経験したいと願う、魔法にかかったような映画が誕生した。

Story

1965年、アメリカのニューイングランド沖に浮かぶ全長26kmの小島、ニューペンザンス島。12歳のスージー・ビショップ(カーラ・ヘイワード)は、厳格でお堅い父、ウォルト(ビル・マーレイ)と口うるさく、いつもせわしない母、ローラ(フランシス・マクドーマンド)、そして3人の幼い弟たちと海沿いの大きな屋敷で暮らしていた。趣味は、本を読んで自分だけの世界に浸ることと、双眼鏡での観察。スージーはその双眼鏡で、母とシャープ警部(ブルース・ウィリス)の密会を目撃してしまう。

同じ頃、ウォード隊長(エドワード・ノートン)率いるボーイスカウトのキャンプ地では、隊員のひとりが置き手紙を残して姿を消す事件が起きていた。

1年前、サム(ジャレッド・ギルドマン)とスージーは教会で『ノアの箱船』のお芝居が上演された時に出会った。ボーイスカウトの活動で劇を観に行ったサムと、カラス役で出演していたスージーは、わずかな言葉を交わしただけで惹かれ合い、文通を始めた。お互いにアウトサイダーであるということにシンパシーを感じたふたりは、1年に渡る手紙のやりとりを通して密かに駆け落ちの計画を練っていたのだった。

草原で落ち合ったふたりは"愛の逃避行"に出る。行き先は"3.25海里 潮流口"。原住民のチックチョー族が大移動した道のりを辿ることでようやく行き着けるその場所は、サムにとって憧れの地だった。手つかずの自然が残ったその美しい入江を"ムーンライズ・キングダム"と名付けたふたりは、海に飛び込み、絵を描き、本を読み、夢を語り合い、ダンスを踊り、初めてのキスをする。

翌朝、2人がいなくなったことに気付いた大人たちはさあ大変！島で唯一の警官、シャープ警部とボーイスカウトのリーダーなのに頼りないウォード隊長は方々に連絡する。一方でビショップ夫妻らもいなくなった娘を探して右往左往。そして2つのチームは桟橋の上で鉢合わせ。娘を誘惑した！とウォード隊長に食って掛かるビショップ夫妻。大人のけんかが始まって事態はどんどん面倒な方向へ…。しかし同じく2人を追いかけていたボーイスカウトの少年たちの誘導により、とうとう2人は見つかり、離ればなれにされてしまう。親元に戻される2人だったが、サムの両親は実の親ではなく里親で、「変わり者のサムはもう引き受けられない」と言うのだった。

冷酷で事務的な福祉局(ティルダ・スウィントン)の説明によると、里親にも見放された問題児のサムは精神鑑定や電気ショック療法を受けて少年収容所に戻される可能性が高く、福祉局でひきとろうとする。長年トレーラーハウスで孤独な生活を送ってきたシャープ警部は、身寄りのないサムを預かり、男同士で愛について語り合うのだった。そしてスージーも自分の思いを初めて母親に打ち明ける。徐々にサムをのけ者にしていたボーイスカウトのメンバーたちも同情するようになり、ウォード隊長に内緒でふたりの駆け落ちを手助けすることに。そして小さなボートを漕いで島からの脱出を図るのだった…。果たしてふたりの逃避行の行方は？そして、やっきになって2人を引き離そうとしていた大人たちは…？

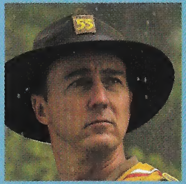

55
FIELD MATE

Cast



ブルース・ウィリス
（シャープ警部役）

1955年生まれ、西ドイツ出身。2歳のときアメリカに移りニュージャージーで育つ。大学で演劇を専攻していたが、中退してオフ・ブロードウェイの舞台に立つようになり、俳優としてのキャリアを積み、『第一の大罪』（80／ブライアン・G・ハットン監督）で映画デビューを果たす。その後、85年にスタートしたTVシリーズ「こちらブルームーン探偵社」の主演に抜擢されて、87年にはエミー賞とゴールデン・グローブ賞で主演男優賞を受賞するなど高い評価を獲得。『ブラインド・デート』（87／ブレイク・エドワーズ監督）で映画初主演、『ダイ・ハード』（88／ジョン・マクティアナン監督）の世界的大ヒットで映画界でもトップ・スター入りを果たす。シリーズ最新作である『ダイハード／ラスト・デイ』は、2013年に公開を控えている。その他、『パルプ・フィクション』（94／クエンティン・タランティーノ監督）や『シックス・センス』（99／M・ナイト・シャマラン監督）、『アンブレイカブル』（00／M・ナイト・シャマラン監督）など作家性の強い作品から、ジェリー・ブラッカイマー製作の『アルマゲドン』（98／マイケル・ベイ監督）などのハリウッド超大作まで幅広く出演。その他の主な出演作品は、『フィフス・エレメント』（97／リュック・ベッソン監督）、『隣のヒットマン』（00／ジョナサン・リン監督）、『キッド』（00／ジョン・タートルトーブ監督）、『バンディッツ』（01／バリー・レヴィンソン監督）、『シン・シティ』（05／フランク・ミラー、ロバート・ロドリゲス監督）、『エクスペンダブルズ』（10／シルヴェスター・スタローン監督）、『RED／レッド』（10／ロベルト・シュヴェンケ監督）、『容疑者、ホアキン・フェニックス』（10／ケイシー・アフレック監督）、『ファイヤー・ウイズ・ファイヤー』（11／デヴィッドバレット監督）、『LOOPER』（11／ライアン・ジョンソン監督）、『エクスペンダブルズ2』（12／サイモン・ウェスト監督）、『噂のギャンブラー』（12／スティーヴン・フリアーズ監督）などがある。今後は、『ダイ・ハード／ラスト・デイ』（12／ジョン・ムーア監督）、人気アクション・シリーズの第2作『G.I.ジョー バック2リベンジ』（12／ジョン・チュウ監督）、『RED レッド2』（13／ディーン・パリソット監督）、『シン・シティ2』（13／ロバート・ロドリゲス&フランク・ミラー監督）などの公開が控えている。



エドワード・ノートン
（ウォード隊長役）

1969年生まれ、アメリカ／マサチューセッツ州出身。イェール大学で天文学、歴史、日本語などを学ぶ。卒業後、NYへ渡り、『真実の行方』（96／グレゴリー・ホブリット監督）でゴールデン・グローブ賞助演男優賞を受賞、アカデミー賞助演男優賞にノミネートされる。主な出演作品は、『世界中がアイ・ラブ・ユー』（96／ウディ・アレン監督）、アカデミー賞主演男優賞にノミネートされた『アメリカン・ヒストリーX』（98／トニー・ケイ監督）、『ファイト・クラブ』（99／デヴィッド・フィンチャー監督）、『レッド・ドラゴン』（01／ブレッド・ラトナー監督）、『25時』（02／スパイク・リー監督）、『幻影師アイゼンハイム』（06／ニール・バーガー監督）、『インクレディブル・ハルク』（08／ルイ・レテリエ監督）、『ディクテイター　身元不明でニューヨーク』（12／ラリー・チャールズ監督）、『ボーン・レガシー』（12／トニー・ギルロイ監督）などがある。また、『僕たちのアナ・バナナ』（00）で監督デビューを果たし、自身で制作会社を設立。『ダウン・インザ・バレー』（05／デヴィッド・ジェイコブソン監督）やドキュメンタリー作品を製作などでも活躍。中でも、『バラク・オバマ　大統領への軌跡』（09／エイミー・ライス監督・アリシア・サムズ監督）はエミー賞に輝く。その他のドキュメンタリー作品には、『The Yunnan Great Rivers Expedition』（03／ジム・ノートン監督）、『Dirty Work』（04／デイヴィッド・サンプリナー監督）があり、後者はサンダンス映画祭でプレミア上映された。また、ウェス・アンダーソン監督最新作『ザ・グランド・ブタペスト・ホテル』（2014年公開予定）の出演も決まっている。



ビル・マーレイ
（スージーの父・ウォルト役）

1950年生まれ、アメリカ／イリノイ州エヴァンストン出身。『ミートボール』（79／アイヴァン・ライトマン監督）で映画デビューを果たし、その後も同監督とは『パラダイス・アーミー』（81）、『ゴーストバスターズ』シリーズ（84・89）と長きにわたって続いた。ウェス・アンダーソン監督作品は『アンソニーのハッピー・モーテル』（96）以外のすべてに出演しており、本作が6作目のタッグとなる。『天才マックスの世界』（98／ウェス・アンダーソン監督）では、ニューヨーク批評家協会賞、全米批評家協会賞ロサンゼルス批評家協会賞。インディペンデントスピリット賞では最優秀助演男優賞に輝いた。また、ジム・ジャームッシュ監督作品にも多数出演しており、オムニバス映画『コーヒー&シガレッツ』（03）の「幻覚」、サテライト賞の主演男優賞にノミネートされた『ブロークン・フラワーズ』（05）、『リミッツ・オブ・コントロール』（09）などがある。また、東京を舞台にした『ロスト・イン・トランスレーション』（03／ソフィア・コッポラ監督）ではアカデミー主演男優賞にノミネートされ、ゴールデン・グローブ賞、BAFTA賞、インデペンデント・スピリット賞、ニューヨーク、ロサンゼルス、シカゴの批評家協会賞などで最優秀男優賞を受賞した。その他の主な出演作品は、『恋はデジャ・ブ』（93／ハロルド・ライミス監督）、『恋に落ちたら…』（93／ジョン・マクノートン監督）、『ワイルドシングス』（98／ジョン・マクノートン監督）、『エド・ウッド』（94／ティム・バートン監督）、『知らなすぎた男』（98／ジョン・アミエル監督）、『クレイドル・ウィル・ロック』（99／ティム・ロビンス監督）、『ハムレット』（00／マイケル・アルメレイダ監督）などがある。今後は、『A Glimpse Inside the Mind of Charles Swan III』（12／ロマン・コッポラ監督）、ランクリン・デラノ・ルーズベルト大統領に扮した『Hyde Park on Hudson』（12／ロジャー・ミッシェル監督）など話題作の公開が控えている。



フランシス・マクドーマンド
（スージーの母・ローラ役）

1957年生まれ、アメリカ／イリノイ州シカゴ出身。79年にベサニー・カレッジで演劇の学士を、82年にイェール大学で芸術修士を取得。卒業後は地方の舞台で活躍。「欲望という名の電車」のステラ役で評価され、ブロードウェイの舞台に立つ。『ブラッド・シンプル』（84／ジョエル&イーサン・コーエン監督）で映画デビュー。コーエン兄弟作品には『赤ちゃん泥棒』（87）、アカデミー賞主演女優賞受賞の『ファーゴ』（96）、『バーバー』（01）、『バーン・アフター・リーディング』（08）の4作品に出演している。アカデミー賞は、『ミシシッピー・バーニング』（88／アラン・パーカー監督）、『あの頃ペニー・レ

イン』(00 ／キャメロン・クロウ監督)、『スタンドアップ』(05 ／ニキ・カーロ監督)で3度助演女優賞候補となっている。その他の主な作品に『真実の行方』(96 ／グレゴリー・ホブリット監督)、『ワンダーボーイズ』(00 ／カーティス・ハンソン監督)、『恋愛適齢期』(03 ／ナンシー・マイヤーズ監督)、『イーオン・フラックス』(05 ／カリン・クサマ監督)、『トランスフォーマー／ダークサイド・ムーン』(11 ／マイケル・ベイ監督)、『きっとここが帰る場所』(11 ／パオロ・ソレンティーノ監督)などがある。また、アニメ『マダガスカル3』(12 ／エリック・ダーネル監督)では声優としてもその実力を発揮した。



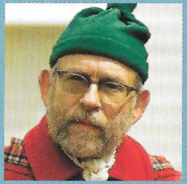
ティルダ・スウィントン
(福祉局役)

1960年生まれ、イギリス／ロンドン出身。『カラヴァッジオ』(86 ／デレク・ジャーマン監督)で映画デビュー。94年のジャーマン死去までに、『ラスト・オブ・イングランド』(87)、『ウォー・レクイエム』(89)、『ザ・ガーデン』(90)、ベネチア国際映画祭で最優秀助演賞を受賞した『エドワード II』(91)など7本の作品に出演した。その後、バージニア・ウルフの原作の映画化『オルランド』(92 ／サリー・ポッター監督)で国際的な名声を得る。そして『ザ・ビーチ』(99 ／ダニー・ボイル監督)でハリウッドデビューを果たし、大ヒットシリーズ『ナルニア国物語』(05 〜／アンドリュー・アダムソン監督)、全米映画俳優組合賞とゴールデングローブ賞にノミネートされ、アカデミー賞助演女優賞を受賞した『フィクサー』(07 ／トニー・ギルロイ監督)などで実力を発揮。一方で、『ブロークン・フラワーズ』(05 ／ジム・ジャームッシュ監督)や『リミッツ・オブ・コントロール』(09 ／ジム・ジャームッシュ監督)や自らプロデュースにも関わった『ミラノ、愛に生きる』(09 ／ルカ・グァダーニ監督) など、作品の大小にかかわらず活躍している。その他の出演作品は、『バニラ・スカイ』(01 ／キャメロン・クロウ監督)、『アダプテーション』(02 ／スパイク・ジョーンズ監督)、『猟人日記』(03 ／デヴィッド・マッケンジー監督、『サムサッカー』(05 ／マイク・ミルズ監督)、『コンスタンティン』(05 ／フランシス・ローレンス監督)、『バーン・アフター・リーディング』(08 ／ジョエル&イーサン・コーエン監督)、ロンドン映画批評家協会賞を受賞した『ベンジャミン・バトン　数奇な人生』(08 ／デヴィッド・フィンチャー監督)などがある。最近では、製作総指揮も務めた。『少年は残酷な弓を射る』(11 ／リン・ラムジー監督)でゴールデン・グローブ賞と全米映画俳優組合賞、BAFTA賞、ロンドン映画批評家協会賞、放送映画批評家協会賞にノミネートされ、ナショナル・ボード・オブ・レビュー賞を受賞した。また、ウェス・アンダーソン監督最新作『ザ・グランド・ブタペスト・ホテル』(2014年公開予定)の出演も決まっている。



ジェイソン・シュワルツマン
(いとこのベン役)

1980年生まれ、カリフォルニア州／ロサンゼルス出身。ウェス・アンダーソン監督作品は『天才マックスの世界』(98)で映画デビューし、シカゴ映画批評家協会から最も有望な俳優賞にノミネートされた。その後、再び同監督のダージリン急行』(07)に出演し、またロマン・コッポラとウェス・アンダーソンと共に脚本を執筆した。その後も監督とのタッグは続き、『ファンタスティック Mr.FOX』(09) では声優を担当した。今後の公開作はロマン・コッポラ監督の『A Glimpse Inside the Mind of Charles Swan III』(12)などがある。その他の出演作品は、『CQ』(01 ／ロマン・コッポラ監督)、『奥様は魔女』(05 ／ノーラ・エフロン監督)、『マリー・アントワネット』(06 ／ソフィア・コッポラ監督)、『ファニー・ピープル』(09 ／ジャド・アパトー監督)、『スコット・ピルグリム VS. 邪悪な元カレ軍団』(10 ／エドガー・ライト監督』などがある。また、ウェス・アンダーソン監督最新作『ザ・グランド・ブタペスト・ホテル』(2014年公開予定)の出演も決まっている。



ボブ・バラバン
(ナレーター役)

1945年生まれ、アメリカ／イリノイ州シカゴ出身。ジョーン・アレンとジェレミー・アイアンズが出演したテレビ映画「Georgia O'Keeffe」(09)は、ゴールデン・グローブ賞3部門とエミー賞9部門にノミネートされた。また、プロデューサーも兼ねた『バーナード・アンド・ドリス』(06)は、スーザン・サランドンとレイフ・ファインズが主演し、エミー賞の全11部門と、ゴールデン・グローブ賞3部門にノミネートされた。また、プロデューサーとして携わった『ゴスフォード・パーク』(01 ／ロバート・アルトマン監督)では、アカデミー賞作品賞・監督賞ノミネート、ジュリアン・フェロウズは脚本賞(原案はアルトマンとバラバン)を受賞した。また他のプロデューサーと共に、BAFTA賞の最優秀英国作品賞であるアレクサンダー・コルダ賞を受賞した。俳優としては50作品以上の映画に出演している。『真夜中のカーボーイ』(69 ／ジョン・シュレシンジャー監督)、『未知との遭遇』(77 ／スティーヴン・スピルバーグ監督)、『アリス』(90 ／ウディ・アレン監督)、『地球は女で回ってる』(97 ／ウディ・アレン監督)、『カポーティ』(05 ／ベネット・ミラー監督)などがある。



ジャレッド・ギルマン
(サム・シャカスキー役)

本作が、プロとしての初めての俳優の仕事である。プロのパフォーミング・アート・スタジオやサマー・キャンプで演技や映画制作を学び、脚本の執筆、演技、また自らが出演する短編映像の編集に日々勤しんでいる。地元ニュージャージーの中学校に入学し、学校のクロスカントリーとフェンシング部に所属しており、ゴルフに熱中している。



カーラ・ヘイワード
(スージー・ビショップ役)

マサチューセッツ州出身。サマーキャンプで演技の魅力に気き、映画のオーディションとしてははじめて参加した本作において、12歳にして見事に主役デビューを勝ち取った。演技のほかには、読書やダンス、詩を含む創作に興味を持っている。彼女の絵や詩は地元で出版されており、"Inspired"や"A Celebration of Poetry"にも掲載されている。

Staff

ウェス・アンダーソン
（監督・脚本・プロデューサー）

1969年、テキサス州ヒューストン生まれ。テキサス州立大学オースティン校で学び、在学中にオーウェン・ウィルソンに出会い、共同で映画制作を始める。『アンソニーのハッピー・モーテル』(96)で監督デビュー。続く『天才マックスの世界』(98)ではインディペンデント・スピリット賞を受賞して、一躍注目を集める。『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』(01)では、盟友オーウェン・ウィルソンと共にアカデミー賞脚本賞にノミネート。この他の代表作に『ライフ・アクアティック』(05)、『ダージリン急行』(07)、短編映画『ホテル・シュヴァリエ』(07)、そしてアニメーション映画『ファンタスティック Mr.FOX』(09)がある。また、最新作『ザ・グランド・ブダペスト・ホテル』は、2013年1月に、独ベルリンでクランクイン。ビル・マーレイ、エイドリアン・ブロディ、エドワード・ノートン、オーウェン・ウィルソンら豪華キャストが顔を揃えている。

ロマン・コッポラ
（脚本）

1965年、フランス／パリ生まれ。父であるフランシス・フォード・コッポラ監督作『ドラキュラ』(92)ではセカンドユニット監督を務め、監督としてのキャリアをスタート。初の長編監督作『CQ』(01)はカンヌ国際映画祭でプレミア上映され、批評家から高い評価を得た。セカンドユニット監督としては、妹であるソフィア・コッポラ監督作『ロスト・イン・トランスレーション』(03)、『ライフ・アクアティック』(04／ウェス・アンダーソン監督)、『マリー・アントワネット』(06／ソフィア・コッポラ監督)などに携わる。サンフランシスコに拠点を置くフィルム会社American Zoetrope社の代表でもあり、彼がプロデュースした『SOMEWHERE』(10／ソフィア・コッポラ監督)はヴェネチア国際映画祭の最高賞、金獅子賞を受賞した。また今後は、自身が脚本・監督を務めた『A Glimpse Inside the Mind of Charles Swan III』の公開が控えている。

スコット・ルーディン
（プロデューサー）

アンダーソン監督とは長い付き合いで、『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』(01)、『ライフ・アクアティック』(05)、『ダージリン急行』(07)、『ファンタスティック Mr.FOX』(09)に続き、本作は5作目の参加となる。その他の主な作品は『アダムス・ファミリー』(91／バリー・ソネンフェルド監督)、『クルーレス』(95／エイミー・ヘッカリング監督)、『トゥルーマン・ショー』(98／ピーター・ウィアー)、『スリーピー・ホロー』(99／ティム・バートン監督)、『ズーランダー』(01／ベン・スティラー監督)、『めぐりあう時間たち』(02／スティーヴン・ダルドリー監督)、『レボリューショナリー・ロード／燃え尽きるまで』(08／サム・メンデス監督)、『恋するベーカリー』(09／ナンシー・マイヤーズ監督)、『ソーシャル・ネットワーク』(10／デヴィッド・フィンチャー監督)、『ドラゴン・タトゥーの女』(11／デヴィッド・フィンチャー監督)、『ものすごくうるさくて、ありえないほど近い』(11／スティーヴン・ダルドリー監督)、『マネー・ボール』(11／ベネット・ミラー監督)などがある。

サム・ホフマン
（製作総指揮）

ペンシルバニア大学を卒業後、20年に渡り、ニューヨークの映画業界やテレビ業界で、制作、監督、助監督としてキャリアを重ねてきた。ウェス・アンダーソン監督とのタッグは長年にわたって続いており、『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』(01)と『ライフ・アクアティック』(05)では第1助監督を、『ダージリン急行』(07)ではニューヨークでのラインプロデューサーを担当した。その他の主な担当作品は、『恋はデジャ・ブ』(93／ハロルド・ライミス監督)、『デッドマン・ウォーキング』(95／ティム・ロビンス監督)、『スコルピオンの恋まじない』(01／ウディ・アレン監督)、『プロデューサーズ』(05／スーザン・ストローマン監督)、『スクール・オブ・ロック』(03・リチャード・リンクレイター監督)、『チェイシング／追跡』(08／ジョン・ボルソン監督)などがある。

ロバート・イェーマン ASC
（撮影監督）

ペンシルヴァニアで生まれ。デューク大学で、文学士号を習得後、南カリフォルニア大学で映画制作の美術学修士号を取得した。アンダーソン監督とは長い付き合いで、『アンソニーのハッピー・モーテル』(96)、『天才マックスの世界』(98)、『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』(01)、『ライフ・アクアティック』(05)、『ダージリン急行』(07)に続き、本作が6作品目の参加となる。CM業界でキャリアをスタートさせた後、映画業界に転じて、『L.A.大捜査線／狼たちの街』(85／ウィリアム・フリードキン監督)の第2ユニットの撮影を担当した。以降、多くのインデペンデント映画の撮影監督をしてきており、その中には『ドラッグストア・カウボーイ』(89／ガス・ヴァン・サント監督)、『ドランページ／裁かれた狂気』(98／ウィリアム・フリードキン監督)、『CQ』(01／ロマン・コッポラ監督)、『イカとクジラ』(05／ノア・ボーンバック監督)を手掛けた。また、メジャー・スタジオで撮影監督をした作品には、ドリュー・バリモアの監督デビュー作『ローラーガールズ・ダイアリー』(09)、『ブライズメイズ　史上最悪のウェディングプラン』(11／ポール・フェイク監督)などがある。

アンドリュー・ワイスブラム ACE
（編集）

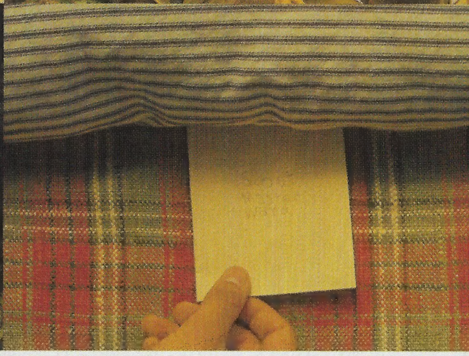
『ダージリン急行』(07)で、初めてアンダーソン監督の作品を手掛け、『ファンタスティック Mr.FOX』(09)では、アメリカ映画編集者協会(ACE)のエディー賞を受賞した。これまで編集を手がけた作品は『ア・ダーティ・シェイム』(04／ジョン・ウォーターズ監督)、『奥さまは魔女』(05／ノーラ・エフロン監督)、『ブロークン・イングリッシュ』(07／ゾーイ・カサヴェテス監督)、『レスラー』(08／ダーレン・アロノフスキー監督)などがあり、『シカゴ』(02／ロブ・マーシャル監督)、『ファウンテン　永遠につづく愛』(07／ダーレン・アロノフスキー監督)では視覚効果エディターを務めた。最近では、『ブラック・スワン』(10／ダーレン・アロノフスキー監督)の編集でアカデミー賞にノミネート。さらにBAFTA賞、エディー賞ノミネート、ボストン映画批評家協会賞の最優秀編集賞を受賞した。

アレクサンドル・デスプラ
（音楽）

48本以上のヨーロッパ映画の音楽を担当しており、多くのセザール賞(フランス版アカデミー賞)にノミネートされている。その中には『つつましき詐欺師』(96／ジャック・オーディアール監督)や『リード・マイ・リップス』(01／ジャック・オディアール監督)、『預言者』(09／ジャック・オディアール監督)、『ゴーストライター』(10／ロマン・ポランスキー監督)などがある。特に、『真珠の耳飾りの少女』(03／ピーター・ウェーバー監督)の音楽でゴールデングローブ賞、BAFTA賞、ヨーロッパ映画賞にノミネートされたことがきっかけで、その後幅広く映画音楽に携わり、『真夜中のピアニスト』(05／オーディアール監督)の音楽は、セザール賞とベルリン国際映画祭金の熊賞をダブル受賞、『クィーン』(06／スティーヴン・フリアーズ監督)、『ベンジャミン・バトン　数奇な人生』(08／デヴィッド・フィンチャー監督)、『英国王のスピーチ』(10／トム・フーパー監督)ではアカデミー賞作曲賞にノミネートされた。その他、『ラスト、コーション』(07／アン・リー監督)、『ジュリー＆ジュリア』(09／ノーラ・エフロン監督)、『ハリー・ポッターと死の秘宝 PART1』(10／デヴィッド・イェーツ監督)、『ハリー・ポッターと死の秘宝 PART2』(11／デヴィッド・イェーツ監督)、『おとなのけんか』(11／ロマン・ポランスキー監督)、『ものすごくうるさくて、ありえないほど近い』(11／スティーヴン・ダルドリー監督)、『ツリー・オブ・ライフ』(11／テレンス・マリック監督)など数々の話題作の音楽に携わる。また、『ファンタスティック Mr.FOX』(09／ウェス・アンダーソン監督)では、アカデミー賞に3曲がノミネートされた。







ISLAND POLICE




ISLAND POLICE



Comments

ブルース・ウィリス

ウェスと仕事ができたのが本当に光栄で、自分が今まで演じたことがないような役柄だったので、とても新鮮だった。通常はリハーサルや演出についての細かいディレクションをしてくれる監督はいないんだけど、自分のキャラクターに対して直接ウェスが指示をしてくれた。この映画は大きかったり小さかったり新しかったり、困難を極める様々な形の愛を描いた物語だが、それはすべて普遍的なものなんだ。誰もが愛されることが必要なんだということ。みんなも愛が必要だろ？

エドワード・ノートン

ウェスは、すばらしい群像劇を作る監督だと思います。オーソン・ウェルズが持っていた劇団のような感じ。それは憧れであって、ウェスは役者のグループを作り上げたと思います。どの俳優たちも彼の映画に出演することが夢だったので、実現できてとてもうれしく思います。彼の新作が出来上がった瞬間に、みんなが「あ！面白そう！」と思ってるよ。
今回の映画の設定がサマーキャンプですが、僕たちにとっても撮影そのものがサマーキャンプのようで、ユニークな体験でした。自分が演じた役はそのボーイスカウトのまとめ役であり、ウェス自身だと思いました。子供のときに誰もが楽しかった思い出がすべて詰まっている、とても楽しい映画です。

ビル・マーレイ

ウェスとは過去に何本も映画をともに作っているけれど、今回もまた個性的な俳優たちを取り揃えてすばらしいと思ったよ。ティルダはこの役にぴったりのモンスターのような演技で、すばらしい女優だよ。ブルースはとにかくマジでアクションスターでしょ？そんな彼がアメリカの田舎の警官を演じるのは、『ダイ・ハード』の様なヒーローと同じなんだと思う。いまだかつて、こんなに撮影中に笑ったことはなかったよ。こういった低賃金で長時間撮影にかかるアートハウスの映画をウェスと一緒に作ることをとてもうれしく感じて楽しんでいるし、そのために、ほかの映画でたくさんガンバってもうけているんだ（笑）。

ティルダ・スウィントン

ウェスがこれまで作ってきた映画は家族的であって、スタッフ、キャストが共に育ってきているものだから、それに自分が参加するというのはとても光栄だったし、大きな冒険でもあった。いつもウェスの映画はひとつのテーマがあって、完璧じゃない大人を子供が救うところがある。そこがすばらしいところ。ウェスが作り出すファミリーに参加するのはすばらしい体験でした。

Review

ウェス・アンダーソン映画におけるフレンチ・タッチ

—— 小柳帝（ライター）

おそらく、この原稿のタイトルを見て、ちょっと当惑される方もあるだろう。なるほど、『ムーンライズ・キングダム』の音楽は、前作『ファンタスティック Mr. FOX』に次いで、フランスの映画音楽家アレクサンドル・デスプラを起用しているかもしれない。 さらに、劇中では、フランソワーズ・アルディの曲が流れてもいた。もっと言えば、ウェス・アンダーソン自身、現在パリに暮らしており、パリに実在するホテルを使って『ホテル・シュヴァリエ』という短編を作っているくらいだ。とはいえ、まるでノーマン・ロックウェルの絵さながらの、このニューイングランド地方を舞台にしたボーイスカウトの世界を描いた映画に、アメリカを強烈に感じることはあっても、よもやフランスとはと。

確かに、『ムーンライズ・キングダム』のインスピレーション源の一つは、ノーマン・ロックウェルだろう。この映画が、1965年というには、もう少しノスタルジックで古き良き時代のアメリカの香りがするのは、おそらくロックウェルが描いた絵を参考に、この映画のキーとなるヴィジュアル・イメージが作られたからだ。実際、ロックウェルは、1912年からボーイスカウトの専門誌「ボーイズ・ライフ」のイラストレーションの仕事を半世紀以上にわたって続けており、そのため、絵以外にも、彼が活動中のボーイスカウトを訪ねた時の写真も数多く残っていて、中には、この映画の1シーンかと見紛うようなものもあるのだ。

その一方で、この映画には、ウェス・アンダーソンのもう一人のグル（導師）とも言うべき、あるフランスの写真家の影を感じずにはいられない。それは、彼がこれまで自分の作品の中で何度も引き合いに出してきたジャック＝アンリ・ラルティーグである。『ムーンライズ・キングダム』の中でも、郵便配達機として複葉の飛行機が登場するが、複葉機は、『ライフ・アクアティック』など、彼が自分の映画の刻印のように、度々登場させて来た前時代的な飛行機である。そのインスピレーション源となったのが、グライダーではあるが、ラルティーグの兄モーリスの作った複葉機「ZYX 24」で、この写真は『天才マックスの世界』の中にも出てくるし、驚くべきは、兄モーリスの通称は「ジスー」で、『ライフ・アクアティック』でビル・マーレイが演じたあの海洋生物学者の名前にも使われていたのだ。実は、ラルティーグは、元々アマチュア・カメラマンで、写真家として本格的に評価されるきっかけとなったのが、1963年にニューヨーク近代美術館で開催された初の個展だったと言われているが、この時キュレーションを担当したのがジョン・シャカスキー（シャーカフスキー）で、何と、『ムーンライズ・キングダム』の主人公サムの名字が、このシャカスキーであった。1965年とは、その展覧会や「ライフ」誌での大特集により、アメリカでもラルティーグの写真が広く知られるようになった時代であり、ウェスは、こうした形で、この映画にもラルティーグの何らかの痕跡を残したかったのかもしれない。

もちろん、ウェスは大の映画狂でもあり、『ムーンライズ・キングダム』も複数の過去の映画を参照しているはずだが、一つは、『小さな恋のメロディ』であることは明白で、子どもたちだけで結婚式を行うとか、駆け落ちをするとか、ストーリー上この映画と重なる点は多いが、ウェス自身認めているように、ここでも彼が愛して止まないフランスの映画監督フランソワ・トリュフォーのある作品が大きく影響しているようだ。その映画とは、『トリュフォーの思春期』で、夏の始まりの時期と、終わりの時期（スージーの家が、島の「サマー・エンド」という地区にあったことを思い出そう）という違いこそあれ、初恋と夏の記憶という、あの永遠のテーマを描いている点で似ていなくもない。ウェスのトリュフォーへの心酔ぶりは有名で、彼がナレーションを多用するのもおそらくトリュフォーの影響だろうし、『ファンタスティック Mr. FOX』に至っては、トリュフォーの『恋のエチュード』や『アメリカの夜』から、ジョルジュ・ドルリューの音楽をそのまま引用していたくらいだ。

音楽といえば、今回珍しくエンドロールを60年代のロックやポップスで豪快に締めずに、映画の冒頭使われたベンジャミン・ブリテンの「青少年のための管弦楽入門」の翻案のような形で作られたアレクサンドル・デスプラのオリジナル曲がエレガントに締め括ったせいか、明確に1965年と時代設定をしたにもかかわらず、これまでのどの映画よりシックスティーズ感が希薄だったように感じられるくらいなのだが、だからこそ、劇中、ポータブル・レコード・プレーヤーでスージーがかけるフランソワーズ・アルディの「恋の季節」が、とりわけ時代の雰囲気を放っていたように思われる。この曲は、後に彼女の夫となるジャック・デュトロンが書いた曲なのだが、実は、『ファンタスティック Mr. FOX』の、人間たちが暮らす街中の建物の一つに「デュトロン探偵社」という看板がかかっていたことは、パリを知る者なら気付いた人も少なくないかもしれない。これは、明らかにルーヴル通りでも一際目立つネオンサインを掲げているデュリュック探偵社の看板のパロディだからである。それを、ジャック・デュトロンの名前に変え、さらに、次の作品でその人の書いた曲を挿入歌として使うなんて、何とも洒落た遊び心ではないだろうか。

もちろん、ここまで書いて来たことに限ったことではない。こうしたことは枚挙に暇がないのだが、最後に、この映画が「ジュマン」という女性に捧げられていることに触れて筆を措きたい。彼女は、もともとレバノン人で（『ムーンライズ・キングダム』でのフォート・レバノンというキャンプ地の名前を思い出そう）、ウェスの作品では、『ファンタスティック Mr. FOX』からの付き合いなのだが、そこではアグネスというキツネの声を担当し、今回の映画では、スージーの読む『Francine Odysseys』という本の表紙のアートワークを手掛けた。彼女もパリと無縁ではない存在なのだが、それはまたのお話ということで…。


JUNIOR KHAKI
PIGEON SCOUT

Production Notes



豪華ハリウッド・スターの競演

「『ムーンライズ・キングダム』は誰にも身に覚えのある話なんだ。初恋の話であり、魅力的な夏の出来事の話なんだ」とコメントするプロデューサーのジェレミー・ドーソン。「男の子と女の子が一緒に逃避行する。この映画は愛らしくも魅力的で、それでいておかしいんだ」。
「映画のタイトルは、2人が逃げて行く入り江のことだ。地図上の正式な名前は『潮口3.25マイル』となっているけど、2人には秘密の魅力的な場所なんだ。だから『月の昇る王国（Moonrise Kingdom）』と名付けたんだよ」。正式な名称と思いを込めた名前の両方ともが、ウェス作品への期待をかき立てている。
福祉局役のティルダ・スウィントンは語る。「この物語では、コミュニティの中の大人たちは自分たちが何をやっているのか分かっていないの。やがて彼らは自分たちが2人の子供たちに劣らず子供っぽくて少しも成長していないことに気付くの。この映画に出演できて嬉しかったし、とても楽しかったわ。構図がしっかりしていて、遊び心があったわ」。
ボブ・バラバンは本作のナレーターとしても登場する。「最初に脚本を読んだ時は、夢中になって脚本を置くことができなかった」と語るベテラン俳優で、監督でもあるバラバン。そこで彼は監督のイメージに合うように数週間かけてひげを伸ばしたのだった。「すごく楽しませてもらったよ。役柄もさることながら、台詞がすごくいい。使われている表現が絶妙だね」。彼が付け加える。「観客はナレーターを通して、映画のスタイルを知るんだ。少女スージーは、読書が好きで、子供たちにたくさんの冒険話を読んであげる。僕はいわゆるその本や彼女の頭の中で作られる冒険話の声なんだよ。しかも僕の役柄はスクリーンにも登場して、少年たちと結びついているんだ」。
ブルース・ウィリスやエドワード・ノートンをはじめ、キャストの大多数が監督と以前一緒に仕事をしたことがなかった。豪華ハリウッドスターたちが、いつもとは全く違う顔を見せるところが本作品の魅力の一つだ。
ビル・マーレイとジェイソン・シュワルツマンは、アンダーソンが賞賛された1998年の作品『天才マックスの世界』で初めて出演して以来、監督作品の常連である。ジェレミーは語る。「ビルもジェイソンも一緒にいていい感じなんだ。ビルは僕等を引っ張ってくれる。僕等の元気な大将なんだ」。

子役の起用

半年以上にも及んだ3度のオーディションのあと、サム役のジャレッド・ギルマンは語る。「学校からの帰りに合格のニュースを聞いた時には、もう叫んで、笑って、泣いちゃったよ。たぶん人生の中で最高にハッピーな日だったと思うよ」。
ジャレッドはサム・シャカスキーという役柄を「彼はボーイスカウトでありとあらゆるバッジを貰っている優秀な子。でも血の繋がっていない兄弟や他のボーイスカウトの隊員たちからいじめられてるんだ。スージーとは教会の野外劇（ページェント）で出会うんだけど、1年以上かけて、2人で逃げ出す計画を立てるんだ」。
スージー役のカーラ・ヘイワードの場合は、オーディションに送った、たった5分のビデオが映画出演に繋がったという。「自分の役柄が気に入っているの。スージー・ビショップは家では誤解されているのよ。幼い3人の弟がいて、父親とはそりが合わなくて、母親は浮気をしている。スージーは感受性が鋭いんだけど、それでいてタフな子なのよ」。
映画初出演にもかかわらず、2人の若き俳優たちは落ち着いて、用意周到に準備をしてきていた。2人ともロケ先に到着するまでに、予習代わりに脚本を隅から隅まで覚えてきていたのだった。
「みんなに記憶力がいいねって言われるの。だからそんなに時間はかからなかったわ。ただ覚えるまで読み返すだけよ」とカーラは語る。
ジャレッドは脚本の暗記に、少し時間がかかったようだ。「脚本を読んだ声を録音して、スマートフォンで何度も何度も聞き返したんだ」と語る。
2人はセットに入る前に、役作りの準備をした。ボーイスカウトで行うカヌーや空手のレッスン、火を使う料理などのやり方を学ぶことで、監督は彼らに自分たちの役柄を研究し、肌身で心情を感じてほしかった。
1965年という映画の時代設定になじむためにやったこととして、ジャレッドはこう語る。「ウェスから（1963年が舞台の）クリント・イーストウッド主演の『アルカトラズからの脱出』を見るように言われたけど、あれは助かった。それに僕の両親にも助けられた。だって2人とも1960年代に育ったからね」。
また、ウェスは手紙のやりとりをするように2人に指示した。映画の中でサムとスージーは出会ってから1年間、お互いに手紙を出し合うからだ。また、脚本では手紙は途中で切れているが、監督は彼らに完結させるようにも言った。2人はE-mailを使ってやりとりをし始めたが、すぐさま監督から手紙でやりとりするように指示された。E-mailをやめ、古風な手紙に代えた2人は、真剣に宿題に取り組んだ。カーラは語る。「ジャレッドのことがよくわかったわ。彼って、すごくおもしろい子なのよ」。ジャレッドは語る。「カーラの手紙の上に方には“スージー・ビショップ”という名前と嘘の住所が印刷された小さなシールが貼ってあったんだ」。
撮影が始まると、ギルマンが最も驚いたのは「朝が早い」ことで、カーラは、映画が基本的にはバラバラに撮影されていることを知ってショックを受けたという。
撮影を振り返ってカーラは語る。「撮影現場では何がなんだかわからなかったの。だって私は映画にもCMにも出たことがなくて、学校の演劇やサマーキャンプのお芝居をやったことがあるだけだったから。映画撮影で気に入っているところは、他の俳優さんの演技を見ること。すごく刺激を受けるもの。役柄に入り込むことに役立ったのは、ウェスの言うことを聞くことだった。よく言われたわ、『これは本当に起きているんだ。これはカーラがやっていることじゃない。スージーなんだ』って」。
主演女優や監督からの助言を受けて、ジャレッドはセットで役になりきった。「サム用のアライグマの毛皮をかぶって、僕が普段付けている



メガネから彼のメガネに替えたら『僕はサムだ』ってなったんだ」。
週末の撮影が休みの日には、監督は2人に仮編集の映像を見せて、2人の演技の相性などについて話し合った。ジャレッドは語る。「ウェスは僕たちに何度もリハーサルをやらせたけど、キスはさせなかった。というのはサムがスージーに初めてキスをするという自然な感じを出したかったからなんだ」。
カーラは今までタイプライターを見たことがなかったため、スージーの母親に扮するマクドーマンドから使い方を教わった。「あの小道具のおかげで、60年代にいるような気分になれたわ」。
さらに思い起こす。「フラン（※フランシスのこと）はすごいわ。私が気に入っているのは、スージーがバスタブに入っていて、母親と話すシーン。すごく優しくて愛情がこもっていて、思いやりにあふれているの。スージーの気持ちがよく表れているわ。フランは演技では別人に見えるから、びっくりしたわ。私も普段とは違うって思われるようになれたらよかったけど」。
ジャレッドも共演者たちに助けられた。ブルース・ウィリスは、いくら台詞が頭に完璧に入っていても、撮影前には台詞の復唱や練習をするよう彼にアドバイスをくれた。
さらに彼は打ち明ける。「僕がネクタイの結び方を知らないと衣装係の人と話しているのを聞いたビル・マーレイが、僕を呼んで、手を回してやり方を教えてくれて、僕1人で出来るかやらせてくれた。ネクタイの結び方を習ったんだ」。
また、ビルは2人に撮影で声が出せるように朝のハミングの仕方も教えたという。ビルは語る。「自分ができることをやればいいんだよ。前に子供にひげ剃りのやり方を教えたことがあったが、今度はネクタイの結び方を教えた」。

ウェス・ワールド

ボブ・バラバンは、ウェスのやり方に驚いたという。「ウェスは独特の感覚で映画を作る。それは才能だけではなく、きちんと整理されている。誰とも違うやり方の映画作りだけど、奇をてらったことをしようとするわけじゃない。自分らしく作っているだけなんだ。彼の態度ははっきりしているけど、セットに緊張感があるわけじゃない。俳優たちは彼のことが好きなんだ。スムーズにことが進んでいれば、彼は好きにやらせてくれるし、何か言いたいことがあれば、そのことを理路整然と言うからね」。
ウェス監督と仕事をして分かることは、彼がいかに几帳面かということだ。彼は自分がやりたいことがわかっており、それをどうやれば撮れるかがわかっている。しかし、それでいて彼のやり方がスタイルを作り出しているのだ。自分の監督としての役割を通して、この上なく楽しんでいることをみんなに見せ、出演者やスタッフも、彼のヴィジョンを共有して、貢献するために招かれた参加者となるのだ。
「ウェスは、脚本家として、プロデューサーとして、監督として、衣装からキャスティングまで、映画に関するありとあらゆることに口を出す」とジェレミーは言う。「そのすべてが、彼が作り上げたい世界に関係しているからだ」。
ウェスの熱意は、出演者やスタッフに感染している。そのほとんどの人間が、1つのプロジェクトで終わらず、彼に協力するようになる。“リピーター”の1人であるジェレミーは、こう言う。「彼は映画作りにかかわった人全員に、映画を冒険のように考えてほしいんだ。インドで列車に乗ったり、地中海をボートで旅をしたりしてね。この作品作りは、まさにこの伝統に沿ったものだ」。
「ウェスは過程を大事にする」と舞台装飾のクリス・モランは語る。「そして自分の周りにいる人間やセットの環境にも気を配る。それによって自分のベストが出せるかどうかが関係してくるからね。映画を作っている時は、クリエイティブな場所に自分の身を置きたいものだからね」。
「ウェスは子供を描くのがすごくうまい。それはスティーヴン・スピルバーグにも言えることだけどね。彼らを励ますんだよ」とバラバンは解説する。
ある意味、ウェスが子供たちとかかわれたのは、彼の映画は大人の持つまじめさと純粋な子供の空想ごっこのような部分を併せ持っているからである。『ムーンライズ・キングダム』は子供たちの秘密の世界に直接入り込み、夏の魔法のようなひとときを描いている。

脚本

監督は、『ダージリン急行』（07）に続いて、友人である映画監督のロマン・コッポラと共同で脚本を書いた。「ウェスはこの作品のコンセプトを温めていたんだ。」とコッポラは打ち明ける。「彼には構想があり、キャラクターも雰囲気もイメージできていたから、僕らはそのことについて話し合った。ふざけ合ったり、お互いにツッコミを入れながら、あらゆるアイデアを具体化して、紐解いていった。台詞が決まると、執筆作業は手早く進んだ。どうしてそんなことができるのか、いつも不思議に思うよ」。
脚本執筆でコッポラの役割は、アイデアを膨らませたり、明確にするのを助けることだった。相談相手がいれば、煮詰まったときの突破口になる。彼は相談係であり、成形担当であり、編集者だった。
また同時に2人は、ニューペンザンスという島コミュニティの王国に引き込まれるような多彩なキャラクターが複雑に絡み合う、よく練られた人間関係図を作り上げた。このコミュニティは、穏やかだが複雑な住民たちが住んでいる場所として知られているのだ。
それゆえ出演者たちは、ストーリーにすぐさま魅せられたという。「最初の1ページ目から、まったく新しい世界に入り込むの」とスウィントンは語る。「美しくデザインされて、この街みたいに完ぺきに計算されている映画の世界というのは、いつもぞくぞくさせられるわ」。
ウェス作品常連のマーレイが付け加える。「すばらしい脚本だよ。全編を通して、興奮する。ロマンとウェスのコンビは、本当にすばらしいね」。








ロケ地

2人の子供の初恋と冒険を描くこの映画の万能のロケ地として、スタッフはロードアイランド州に焦点を合わせた。ほどよい数の人が住んでいて、車がほとんど走っていないニューペンザンスは、子供の想像力と冒険心をかき立てる場所として最適だ。

ロードアイランドの何キロも続く美しい海岸線と、その落ち着いた地形が決め手となり、ロケ地を決定した。この州には、なだらかな野原、ごつごつした渓谷、高地からの見晴らし、森や海岸や岩の多い入江もある。本作のロケ地として、最も多く撮影したのはナラガンセット湾だった。他には1800エーカー（7.3平方キロ）あるキャンプ・ヤウグーで夏直前に撮影し、またジョージ・ワシントンも教区民だったというニューポートにある歴史的なトリニティ教会などである。

ニューペンザスの教会での撮影には出演者もスタッフも特に気を遣った。スージーとサムが初めて出会った野外劇の場所と、彼らの冒険が一回りしてくるクライマックス・シーンである。

ナラガンセット湾のプルーデンス島は映画撮影のロケ地として最も珍しい場所だった。何か買うにも小さな商店が1つあるだけだった。浜に足を踏み入れるために地域の環境をきれいにして、フェリーをチャーターして、スタッフを撮影現場に入れた。その土地は手つかず状態に見え、その映像がスクリーンでも映えている。

撮影

ウェス監督は撮影前に用意周到に準備し、必要最小限のスタッフで撮影をした。大きなトラックやトレーラーも使わなかった。出演者はセットに入る前にホテルの部屋で衣装に着替えてくるように言われていた。撮影はほとんどが自然の森の中の光景で、これを映画の中に織り交ぜた。丸1週間、森で過ごすこともあったが、このコンパクトな撮影隊は、きわめて自由がきくものだった。

ジェレミーが思い出しながら振り返る。「僕らはヴァンで走り回って、子役の子たちと撮影したんだ。カメラは軽量で小さかったから、重たい荷物で動きがとれないというようなことはなかった。テクノロジーと創造性の融合のたまものだね」。

ひとたびメインの撮影が始まると「キャンプ場か、管理が行き届いた遊び場にいるような感じだった」とバラバンは語る。期待していたとおりだった。ウェスは、出演者やスタッフに限りなく映画のストーリーに近い体験を共有してほしかったのだ。

ビル・マーレイは回想する。「僕の初日はキャンプのセットだったんだが、（控え室の）トレーラーは用意されていなかった。代わりにテントがあった、それも小型のね。外は気温が4℃で雨が降っていたけど、51人もの人間が1つのテントに押し込まれると、すごく暖かくなる。しばらくすると心地よくなっていった」。

プロダクション・デザイン

出演者とスタッフを近づけたもうひとつの要因は、共同で空想の世界を作り上げたことだ。ユニットのどのメンバーも、出演者たちを助けて、その役柄や彼らの住む世界に入り込む手助けをした。

美術監督のジェラルド・サリバンは語る。「美術部門の僕らにとって最大の問題は、1965年当時のそのエリアの建物に関するリサーチだった。常にウェスと連絡を取っていた。彼は調査した写真の束を持っていて、僕らのデザイン用に使わせてくれた」。増えていった写真をスタッフ全員がアクセスできるようにプライベートなウェブサイトを作った。

舞台装飾のクリス・モランがウェスと初めて仕事をしたのは『ザ・ロイヤル・テネンバウムズ』（01）の小道具係としてだった。彼女はこう語る。「ウェスはディテールにこだわるから、私たちはアンティーク・ショップを探し回ったり、スタッフや知り合いから物を借りたりしたの。もしウェスが、誰かの家のポーチで気に入った物を見つけたら、それを探し回る。この映画はウェスの他の映画とは違った美的な部分があるわね。やや荒削りで、人間味を感じる。それでもヴィンテージものの小物やセットの装飾、衣装には、こだわりをもって制作費に応じたものをそろえているわ」。

トレーラーハウス

ブルース・ウィリス演じるシャープ警部のトレーラーハウス。希望していた1952年型のスパルタネッテをテキサスのディーラーが探してくれた。だがロバート・イェーマンのカメラが中を動き回れるように、最終的には2つに切って、作り直した。内装は手を付けなかったが、内側での360度の視野が撮れるように変更し、全面的に手を加えている。

ボーイスカウト（＝カーキスカウト）

エドワード・ノートン扮するウォード隊長率いるカーキスカウト、北アメリカ第55隊のキャンプ用のテントが必要だった。スタッフは古いデッドストックのテントがないか国中を探すと、陸海軍放出品店で、わずかに2つだけ年代物のテントが見つかったが、色も形も大きさも、望んでいたものではなかった。ウェスの指定したカーキスカウトのテントはパイプ製（明るい黄色）で裏地（格子縞、ワード隊長用のテントはタータンチェック）がついたものだったのだ。そこで既存のテントを改良するということはせず、すべてのテントを特注で作ることになった。

ニューハンプシャー州にあるテントスミスズ社は、歴史上のテントの再現を得意としている。1950年以前のテントの複製を対象としているが、スタッフは1965年のものを作るのに挑戦してくれた。モランは語る。「テントスミスズ社の人たちはみな、理解してくれて、すばらしいテントを作ってくれたわ」。

プロダクション・デザイナーのアダムは、『ムーンライズ・キングダム』全体の見た目を監督し、すべての部門との調整をしなければならなかったので、彼の調査は多岐にわたった。

彼は言う。「ごく普通の日常生活から特殊なものまで、すべてを調べた











んだ。たとえば、こう考える。"常夜灯のスイッチが出来た年代は、いつなんだ？" ってね。そうするとミスは犯せないんだ。ボーイスカウトやキャンプの歴史も調べたよ」。
キャンプ場の看板は板と棒を組み合わせて作り上げた。テント同様に、ストーリーで登場するカヌーも特徴あるデザインだった。ロードアイランド在住の現役の職人集団が準備作業に加わってくれた。彼らの貢献を例に挙げながら、モランが興奮して語る。「地元のアーティストのジェームズ・ラングストンはカヌーの正面に小さなアライグマを彫ってくれ、何本かのトーテムポールも作ってくれたわ。クリス・ワイリーは、ウォード隊長のテント用にトウモロコシで作った装飾（たとえば彫りの装飾品）を作ってくれたし、別のアーティストはテントの中で使う、全部枝でできた家具を作ってくれたわ。すべてチコリーでできているのよ。それからチェーンソーを持っているアーティストがカーキスカウトのキャンプ場の看板の上にトーテムポールを作ってくれたの」。

ビショップ家

設定に合った家が見つかるのを祈るしかなかったが、ビショップ家の外観として選ばれたのは、ロードアイランド州ジェームズタウンにあるコナニカット・ライトという、以前は灯台だったところだった。室内に関しては、ロードアイランド州ミドルタウンのストリップモールにあった空き店舗を防音スタジオにして、そこに部屋を作った。スタジオは、恵まれた立地条件で設計的にも調度選びから、すべての家の最良の要素を取り入れて改造された。
「参考にした家はどれも独特の雰囲気の家だった」。アダムは驚きを隠せずに語る。「僕らが好きなところを組み合わせたら、それぞれのよさが活きて、そこに住む家族像が浮かび上がった」。
ニューイングランドらしさを出す必要があったため、どこでも見たこともないような作りのものも多くある。セットとその周りの環境というのは、キャラクターや俳優を支える役割を担うものなのだ。

ヴィンテージ

ビショップ家の中に施された独特のものは、腰板や年代を感じさせる折衷的なインテリアだった。家の全体に置かれた本、弁護士である両親が休暇先で購入したものがあった。ヴィンテージ本を置いたり、その他のものはスタッフが製作した。家具の一部や工芸品は借りたりもしたが、その中には画家アルソン・スキナー・クラークの作品もあった。かつては灯台であった家なので、海を感じさせるものがビショップ家の中には漂っていた。
物語の時代設定は1965年であるが、時代の融合性というものが1960年代半ばという時代を通して表されている。映画の中では1940年代と1950年代のものを置くスペースが作られており、そこには芸術に対する強い愛情が感じられるさまざまなものが並んでいる。
「とても美しかったよ。すべてが手作りでね」ビル・マーレイは賞賛する。「これまで出会ったセットの中でも最高の部類に入るよ。スタッフは時間をかけて本物そっくりに作っていたからね。本当にそこに住む主人が飾りつけたあとのようで、その魅力に魅せられたような感覚だった。演技をしていてもそれが感じられた」。

衣裳

俳優たちが着るものに関しては「ウェスは、事前のリサーチをずいぶんやっていたわ」と衣装デザイナーのカシア・ワリッカ＝メイモンは語る。彼女はアンダーソンと膨大な量の写真を調べ上げた。そのほとんどが本だったが、「"これならキャラクター像を膨らませ豊かにしてくれる"と感じられるものを求めていたわ」と話す。"ノアの箱舟"の教会の野外劇のシーンで使われる動物のコスチュームは、指揮者のレナード・バーンスタインとベンジャミン・ブリテンの解釈による"動物の謝肉祭"の影響を受けた。子供の頃のウェスの姿も映像に映し出され、監督の家族や彼の写真も参考にした。衣装の発想の元は本物のヴィンテージをリサーチしたが、多くが手作りであったため、ウェスの考えにも沿うことができた。ミスター・ビショップは誰よりも保守的だから、彼の衣装は誰よりも抑えたものだ。
スージーの日曜学校のサドルシューズは1960年代のリサーチに基づいて、靴底が革のものを探していたため、調達に長期間かかった。
衣装で一番大きな問題となったのは、カーキスカウトの制服のデザインだった。監督との相談の結果、衣装部門のスタッフはソックスからボタンまで、制服にまつわるすべてのものを手作業で行った。350着を作る作業は膨大なものだったが、短い期間で完成させ、フエルトで出来たアライグマのマスコットのワッペンは制服の上に手縫いされた。
現実の福祉局員は制服は着ていなかったが、ワリッカ＝メイモンは、制服を着た女性が同じように働く救世軍に注目し、インスピレーションを貰った。彼女は最終的なものが浮かぶまで、形を強調しケープを大きくした。ティルダによって日の目を見たのは、帽子風のかつらだった。
「福祉局の人の制服は、一番機能的だったわ。私たちが作ったものの中でもっとも身体に合うように作られていたわ」とワリッカ＝メイモンは言う。ティルダが丹念に作り上げたのは、権威や強圧的力を代表する役割だ。青と白の制服で、パンツスーツだった。彼女は頭の上に救世軍のかぶる帽子をかぶっている。そして赤いリボンでクビのところで喋々結びで止められている。
ティルダは語る。「私の母はフランが着ているようなものに似た感じの服を着ていたの。これらの色は私の幼い頃の体験から骨身にしみついているの。衣装はとても正確に時代を表しているわ」
対照的に、フランシス・マクドーマンド扮するビショップ夫人の衣装は、1960年代の女性アーチストや画家や作家といった服装を混合させたようなものになっている。監督の裏話では、ビショップ夫人は弁護士で、芸術家の家で育った、そのため彼女の衣装はより色彩が多く取り入れられている。

Review

色彩も情感も趣味のよい映画

—— 芝山幹郎（評論家）

最初は、ドールハウスの話かと思った。断面の黄色いドールハウス。赤や橙や臙脂が差し色になり、小宇宙のなかで子供たちがにぎやかに動きまわっている。

だが、ドールハウスの話ではなかった。ドールハウスから逃れたがっている12歳の少女が出てくるのだ。名前はスージー（カーラ・ヘイワード）。眼のまわりは青いシャドウで隈取られている。スージーは問題児だ。本の世界に没入し、家族をにらみつける。舞台は1965年のニューペンザンス島。つまり、大西洋に浮かぶニューイングランド地方の小島。

問題児はもうひとりいた。島の南端で野営していたカーキ・スカウト隊から、分厚い黒ぶち眼鏡をかけた少年が脱走したのだ。年齢はやはり12歳。名前はサム（ジャレッド・ギルマン）。孤児で、里親は冷たい。

サムとスージーは1年前に出会い、たちまち恋に落ちて、文通をはじめた。やがてふたりは決心する。駆け落ちをしよう。いまの生活から脱獄しよう。ただし、ふたりは思春期前夜の12歳だ。性の匂いは淡く、他者に暴力をふるうことも少ない。

おや、『大人は判ってくれない』の世界だろうか。私は反射的にそう考えた。もちろん、トリュフォーの傑作とはタッチが異なる。舞台も、周囲の人物も、行動形態も全然ちがう。ただ、主人公のエモーションが似ている。手の届かないものに胸を焦がしているせつなさが、波動となって伝わってくる。

そんなふたりの決心を、監督のウェス・アンダーソンは、映画がはじまってすぐに明かす。いつもそうだが、彼の映画は色がきれいだ。衣裳や装置の趣味が図抜けて素晴らしく、役者の顔も面白い。面白いのはサムとスージーだけではない。小さな島には不釣り合いなほど、他の登場人物もカラフルだ。スージーの両親（ビル・マーレイとフランシス・マクドーマンド）、カーキ・スカウトの隊長（エドワード・ノートン）、島の警察署長（ブルース・ウィリス）。彼らは、もたもたとふたりの行方を追う。そして同じころ、島には巨大なハリケーンが接近しつつあった。

どうです、ほとんど寓話の世界でしょう？「昔々」ではじまり、いつの間にか読者を魔法に引きずり込んでいる寓話の世界。

しかし、即断するのもせっかちではないか。そもそも、『ムーンライズ・キングダム』には甘くて愛くるしい主人公など出てこない。12歳の少年少女は、すでにたっぷりと現実の空気を吸い込んでいる。たとえば、スージーが「ラヴ」という言葉を口にする場面を思い出してみよう。その瞬間、サムは苛立った表情を浮かべる。そしてつづける。ねえ、いってることの意味がわかってるの？

そう、この映画は寓話をはみ出している。寓話のおかしさ、寓話の残酷さ、寓話の魔術性をたっぷりと借りながら、暗い森や妖怪や魔法使いを登場させない。むしろアンダーソンは笑いに眼をつける。とぼけた笑いを駆使しながら、情感の深い部分へと降りていく。

情感の深い部分とは「もののあわれ」につながる世界だ。先ほど私は「手の届かないものに胸を焦がすせつなさ」という言葉を使った。その情感は映画が進むにつれて深まり、やがてこの世の無常にあきらめを覚えるかのようなメランコリーへと結びつく。

そうか、季節が過ぎていくのか。

映画を見ながら、私はつぶやいていた。サムもスージーも、少年期の終わり、少女期の終わりに薄々気づいている。大人まではあと一歩だ。大人になれば、無謀な冒険に飛び込むこともきっとむずかしくなる。

だからこそ、彼らの姿はせつない。おかしくて、せつない。アンダーソンは、そんなせつなさと美しさとおかしさを、まるごと汲み上げた。濁りをできるだけ避けた色彩設計や、控え目で抑えの利いた芝居も、すべてその感性の産物だ。色彩や構図の趣味がよい映画ならほかにもあるだろうが、情感の趣味までよい映画にはなかなか出会えないと思う。





Director's Comment

60年代という設定について

意図したわけではなく、偶然そうなった感じなんだ。なんとなくノーマン・ロックウェルが描くアメリカをイメージしたんだ。それは皆がイノセントだった最後の時代という印象があったから。この子たちが18歳になる頃は、アメリカは文化の転換期にさしかかるだろうね。
60年代の音楽は、ジャンルも関係なく好きだよ。あの時代を懐かしく思うというわけではなく、あの時代の音楽が好きなんだ。今回の映画ではあの時代のノスタルジアを印象づけるという作業はやったけど、個人的にそのノスタルジア自体に興味があるわけではないんだ。

自分の撮影スタイルについて

基本的に自分は同じメンバーと同じ仕事をしていて、それは同窓会のような感じ。そういう関係性を築いていくのが好きだし、そこに新しい風を吹き込むのも新鮮。僕は舞台をやったことはないけれど、そういう関係性は舞台の関係に近いんだと思うよ。
例えばロバート・アルトマンという監督は、現場で俳優たちに自由に演技をさせて、そこでおこる偶発的な瞬間をとらえることが彼の映画作りのスタイルとなっていた。僕のやり方は正反対で、僕は偶発的な事が起こるのを現場で待っているのではなく、後でラッシュを見たり編集の時に、突拍子もない事が結果的に起こっている事を見つけるのが好きだし、それを望んでいる。実は、いつも僕は新しい映画に入る時、前の繰り返しにならないようにというプレッシャーを感じているんだ。とはいえ毎回全く異なる映画を作っているという気がしているんだけど、絶対に変わる事はない何かがあるのは確かだ、筆跡のようにね。僕は監督として恵まれていると思う。新作を作りたいと思えば、同意して作ってくれる人がいつもいる。もちろん最初の映画は全然ヒットしなかったし、2作目の「天才マックスの世界」もかなり時間がかかった。でもその後は、ラッキーにも順調に作り続けられてる。

子供たちを主人公にしたことについて

いつも心がけていることだけれども、子供の頃に楽しかったこと、感じたことを映画にしようと思った。僕の場合はこの映画のような、女の子との恋はなかったけど、この作品で「こんな子供時代を過ごせたらいいな」という願望を込めたよ。
スージーは、家族から孤立していて悩んでいる。でも僕がいつも思うのは、また違った形の家族というものもあって、家族を築き上げようとしている人たちもいる。ひとつこの映画ではっきりしているのは、子供たちだけが自分が欲しいものが何か分かっていて、それを得るために懸命になっている。僕は決して子供が皆イノセントだとは思わないけど、彼らの話し方や行動に出る純粋さというのは子供たちにしか出せないもの。それは彼らにとっての特権だし、何でも可能だという証なのかもしれない。

ブルース・ウィリスの起用に関して

警察官という役が出来た時、何人かの俳優を頭の中で想定してたんだけど、でも警察官として説得力があって、孤独で不安定でシャイで悲しそうというキャラ、それを完璧に演じれるのはブルースしかいないと思った。

Credits

製作:フォーカス・フィーチャーズ、インディアン・ペイントブラシ
提供:アメリカン・エンピリカル・ピクチャーズ

【出演】
ブルース・ウィリス:シャープ警部
エドワード・ノートン:ウォード隊長
ビル・マーレイ:ミスター・ビショップ
フランシス・マクドーマンド:ミセス・ビショップ
ティルダ・スウィントン:福祉局
ジャレッド・ギルマン:サム
カーラ・ヘイワード:スージー
ジェイソン・シュワルツマン:ベン
ボブ・バラバン:ナレーター

【スタッフ】
監督:ウェス・アンダーソン
脚本:ウェス・アンダーソン、ロマン・コッポラ
プロデューサー:ウェス・アンダーソン、スコット・ルーディン、ステーヴン・レイルズ、ジェレミー・ドーソン
製作総指揮:サム・ホフマン、マーク・ロイバル
撮影監督:ロバート・イェーマン(ASC)
プロダクション・デザイナー:アダム・ストックハウゼン
編集:アンドリュー・ワイスブラム(ACE)
音楽スーパーヴァイザー:ランドール・ポスター
音楽:アレクサンドル・デスプラ
カーキ・スカウトの行進曲:マーク・マザーズボー
演奏:ピーター・ジャーヴィスと彼のドラム・コープス
衣装デザイン:カシア・ワリッカ=メイモン
共同プロデューサー:モーリー・クーパー、リラ・ヤコブ
協力プロデューサー:オクタヴィア・ペイセル
キャスティング:ダグラス・エイベル

【CAST】
Bruce Willis as Captain Sharp
Edward Norton as Scout Master Ward
Bill Murray as Mr. Bishop
Frances McDormand as Mrs. Bishop
Tilda Swinton as Social Services
Jared Gilman as Sam
Kara Hayward as Suzy
Jason Schwartzman as Cousin Ben
Bob Balaban as the Narrator

【STAFF】
Directed by Wes Anderson
Written by Wes Anderson & Roman Coppola
Produced by Wes Anderson, Scott Rudin, Steven Rales, Jeremy Dawson
Executive Producers Sam Hoffman, Mark Roybal
Director of Photography Robert Yeoman, ASC
Production Designer Adam Stockhausen
Editor Andrew Weisblum, ACE
Music Supervisor Randall Poster
Original Music by Alexandre Desplat
Khaki Scout Marches by Mark Mothersbaugh,
Performed by Peter Jarvis and his Drum Corps
Costume Designer Kasia Walicka Maimone
Co-Producers Molly Cooper, Lila Yacoub
Associate Producer Octavia Peissel
Casting by Douglas Aibel

日本語字幕:石田泰子

(2012年/カラー/アメリカ映画/94分/PG-12)

提供:ファントム・フィルム/ハピネット
配給:ファントム・フィルム
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-11-2 代々木コミュニティビル3F
TEL:03-6276-4035 moonrisekingdom.jp
発行日:2013年2月8日
編集:ファントム・フィルム
デザイン:thumb M
印刷:アベ印刷
定価:700円(税込)




Focus Features and Indian Paintbrush Present an American Empirical Picture "Moonrise Kingdom"
Casting by Douglas Aibel Co-Producers Molly Cooper Lila Yacoub Costume Designer Kasia Walicka Maimone
Original Music by Alexandre Desplat Music Supervisor Randall Poster Editor Andrew Weisblum, ACE
Production Designer Adam Stockhausen Director of Photography Robert Yeoman, ASC Executive Producers Sam Hoffman
Mark Roybal Produced by Wes Anderson Scott Rudin Steven Rales Jeremy Dawson
Written by Wes Anderson & Roman Coppola Directed by Wes Anderson